

建学の精神と

酪農学園大学の使命



RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学



酪農学園大学公式HP

建学の精神と

酪農学園大学の使命

題字…原田

勇

==おめでとう==

建学原論の後編では、前編の理解編に引き続いて、現状編と継承編として構成される内容を、学内外の複数の講師による講義で行います。

現状編では、まず酪農学園の使命に関して酪農学園理事長から、次に建学理念の三愛主義に関して学園宗教主事、そして「農・食・環境・生命」を基軸とする教育・研究体制の四名の教員、継いで、学生生活全般および将来ビジョンに関して二名の事務職員、さらには、酪農学園とルーツを同じくする雪印メグミルクから迎えた講師一名、全六回にわたります。歴史を踏まえながら未来に向う現在進行形の状況と位置付けられる内容が展開されます。

継承編では、三名の卒業生を講師としてお招きし、三回にわたって講義が行われます。社会の様々な現場で、本学の建学の理念を基に活躍されている事実に出会ってほしいと願います。

後編の本テキスト「建学の精神と酪農学園大学の使命」には、各講師のプロフィールと講義のレジユメをまとめています。あらかじめ目を通して、講義では、生の声で語られる内容に耳を傾けてください。

二〇一一年度から開講された建学原論継承編の「講師一覧」を巻末に挙げています。三〇名の方々活躍されている分野は多岐にわたっていることが一目瞭然かと思えます。酪農学園大学は、二〇二〇年度に開学六〇周年を迎えました。講師の中には、開学当初に入学された方もおられます。卒業学科の様々な名称から、大学の教育・研究体制の拡大発展の過程を垣間見ることのできるでしょう。そのようなことも参考となれば、幸いです。

目次

はじめに

現状編

1 酪農学園の使命

酪農学園大学の「自校教育のすすめ」

谷山 弘行 4

2 酪農学園の精神

「三愛主義」について

朴 美愛 8

3 建学の精神と「農・食・環境・生命」

This little light of mine

人との出会い、酪農学園大学との出会い

吉中 厚裕 12

北海道の食産業を担う人材へ

菅野美樹夫 14

教養にこそ価値がある

阿部 茂 16

4 建学の精神と酪農学園大学の学生が目指す進路

転機と感性

森 志郎 18

高山 基樹 20

	自身が選ぶ道を「正解」に	入江 遥	22
5	酪農学園の建学と酪連 ～北海道酪農の振興を目指して～ 酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神	下村 善計	24
継承編			
1	酪農学園の教育理念の継承Ⅰ 酪農学園で得たもの	鎌田 一宏	28
2	酪農学園の教育理念の継承Ⅱ ソムリエの仕事と酪農学園の学び	水上 貴	30
3	酪農学園の教育理念の継承Ⅲ 自分らしく生きるために	田中 仁	32
	継承編講師一覧(二〇一一年～二〇二〇年度)		36
	編集後記		38



酪農学園大学の使命

酪農学園大学の「自校教育のすすめ」

はじめに

新入生の皆様に、最初に理解していただきたいことをお伝えします。皆さんは、それぞれ動機は異なっていますが、自分の選択肢として酪農学園大学を選び、受験の結果、入学され、大学生としての学びの一步を踏み出しています。しかし、酪農学園大学がどうやってできて、どうやって今ここにあるか、についてどれだけの知識を持ち、かつ理解されているのか。その「広さ、深さ」を確認するための手解きを「自校教育のすすめ」として、カリキュラム（基礎教育・建学原論）の中で取り組むことといたします。

酪農学園大学の生い立ち

現在の酪農学園大学ならびに酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校は、学校法人酪農学園が設置する私立学校です。文部科学省の定める私立学校法では、「私立学校は設立の目的を明らかにし、個性的で自由な人間教育を通して社会に貢献することが求められる」としています。すなわち建学の精神を明確に定めるように求めています。この法律のもとに多くの私立大学は「建学の精神」に基づく教育活動を行なっています。酪農学園では、大学および高校とともに「三愛主義」を建学の精神とし、「健土健民」を教育の理念としております。この教えは一九三三年に設立された「北海道酪農義塾」に遡ります。以来八〇年に及ぶ酪農学園の歴史の要点を振り返りながら、本書が酪農学園大学の歴史を踏まえた存在の意味と、皆さんの未来につながる「いま」



谷山 弘行

(タニヤマ ヒロユキ)

● 所属

学校法人酪農学園理事長

● プロフィール

宮崎県立小林高等学校
広島県立農業短期大学(中退)

酪農学園大学酪農学部獣医学科卒

帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士課程獣医学専攻修了

帯広畜産大学獣医学科助手
酪農学園大学獣医学部講師
酪農学園大学獣医学部教授

と「ここ」が見える導きになればと願っています。酪農学園の歴史は書籍「酪農学園史一、二、三」に詳細に記述されています。図書館にも配置されていますので、卒業まで一度は手に取って読んでいただくことをお勧めします。

学園創立者「黒澤西蔵」の思想

「北海道酪農義塾」は昭和八年、現在の札幌市の苗穂の地に誕生しました。学園創立者「黒澤西蔵」の長年の構想。「農業は教育によつて支えられる」の第一歩でありました。黒澤西蔵は著書「酪農学園の歴史と使命―私はなぜ酪農学園を作ったか」(一九七〇年一月発行)で、それまでの学園の歩みを振り返つて学生、教職員、卒業生、そして教育活動を支援していただく篤志家に向けて学園設立の真意を伝えています。

渡良瀬川流域の農民を苦しめた足尾銅山鉍毒事件を明治天皇に直訴(明治三四年)した田中正造の教えを直に受けた黒澤西蔵少年(一六歳)は、農業の重要性を悟り、北海道の地でデンマーク農業を手本に酪農振興に生涯を尽くしました。冷涼な北海道の痩せた土地は畑作や稲作には適さない、地力を確保するには家畜の堆肥を還元する有畜農業が最適であるとの考えで酪農の振興に生涯を費やしました。この考えが後の循環農法図(sustainable agriculture)を導きます。現在の環境再生型農業(regenerative agriculture)のSDGs(sustainable development goals)の考え方の基礎になる理念です。そして、この循環農法図に基づく酪農振興を担う若者の教育が必要と確信し、学校教育に踏み出しました。一九四二年には、現在の江別市文京台キャンパスに移転し、野幌機農学校そして野幌機農高等学校(一九四九年)を設置しました。戦後の人口増加と高度経済成長を示す日本の食料増産の未来を見据え、酪農学園短期大学(一九五〇年)を設置し高等教育に踏みだしました。これが今日の酪農学園大学の源となるのです。

酪農学園大学獣医学部学部長

酪農学園大学・短期大学部学長

酪農学園大学学長

学校法人酪農学園理事長

出身地

宮崎県えびの市飯野区田代
(旧西諸県郡飯野町田代)

酪農学園大学の足跡

酪農学園短期大学が発足して一〇年後の一九六〇年、四年制の酪農学園大学を設立しました。農業教育の学術的振興を図ったことです。酪農学部・酪農学科として始まり、後、農業経済学科、獣医学科、食品科学科、食品流通学科が加わり五学科に成長、一九九六年には獣医学部・獣医学科が独立し二学部体制、一九九八年に地球環境問題を研究教育する環境システム学部（地域環境学科、環境マネジメント学科、生命環境学科）が発足、酪農学園大学は三学部体制となりました。しかし、これらの学科設置が順調に進んできたわけではありません。獣医学科の設置には、「獣医師の少数精鋭主義」を主張する日本獣医師会、北海道獣医師会、既存の獣医科大学が強い反対運動を展開しました。当時、国が進める酪農振興政策で増える乳牛の病氣治療に必要な獣医師の不足が社会問題となっている時代でありました。こうした苦難の末、国の認可が下り設置されたわけです。こうした歴史の中で世に巣立った卒業生の活躍は目を見張るものがあります。

酪農学園大学の改革とその目的

一九八〇年代、経済高度成長期もすでに終わり、膨張した社会構造の矛盾が露呈し始めました。同時に大学教育の機能不全が問題視されるようになってきました。これに対し、多くの大学は教育改革に取り組み、改革を繰り返してきましたが、個性を失う画一的な大学に変貌してしまいました。こうした中、二〇〇八年、酪農学園大学教授会は「建学の精神」を個性として生かす教育の展開を確認し、その道筋を決定しました。二〇一一年、「酪農学園大学の原点と目指す教育」とした改革で教育体制を二学群五学類に改組しました。この新しい制度の中で、全学横断的教育を基盤教育として初年次に配置し、「建学の精神」を体系づけて学ぶ「自校教育」としました。「建学原論、健土健民入門実習」科目で学習することになっています。さらにこの科目は教職員も共に学ぶべきものとして位置付けており、多数の教職員が自己教育も

含めて講義・実習に参加しています。加えて卒業生にも講師をお願いし、多角的に「建学の精神」の学習に努めています。さらに当大学独自の「基礎ゼミ農園」実習を導入しました。これは、すべての新入生が「健土健民」を学ぶための入門編として計画しています。学ぶべき教材は、土（自然）であり、牛（動物）であり、作物（植物）であり、共に学ぶべき者は学生と教職員（人）であります。この多角的教材を元にお互いが教育し合い（相互教育）、共に成長していく課程を構築することを目的としています。さらに知行合一（知っていることと行いが一致しなければならない）の精神を学ぶ入門編でもあります。知識だけでは十分ではない、実践してみても初めてその意味が理解できます。実学とも言いますが、理論を学び実践を通してその意味を知ることです。皆さんは土を耕したことがありますか。タネを播き、収穫の経験がありますか。家畜（牛や豚など）と触れ合ったことがありますか。食糧を生産する実学の一步として「基礎ゼミ農園」実習を位置付けしています。

むすびに

大学での「学び」は「教わる」ことだけではありません。教育を受ける立場であっても、皆さんは教員と共に学説を検証し、新たな学説を提唱する役割があります。大学は学生、教員、職員の三つの人材要素から成り立ちます。それぞれの立場は異なっていますが学びを深め、その質を高めることは等しく与えられた権利であり義務でもあります。皆さんはその一員として自分の立ち位置を模索する四年あるいは六年という時間と空間が保証されていると言えます。この時間と空間を実あるものにするために、皆さんに「自律と自立」という言葉を贈り、学園創立者の思いを次の世代に繋いでいただくことを願っています。



酪農学園の精神

「三愛主義」について

はじめに

私と酪農学園との最初の出会いは不思議なことに二〇年前知人の息子さんの学位記授与式に同行することであった。栃木県から初めて訪ねた北海道の三月はまだまだ真冬で、周りはどこを見ても真っ白、道路脇は二メートル以上の雪壁になっていた。すべてが初めての経験で、素敵な雪景と莫大なキャンパスの広さに感動と共に圧倒された記憶は今でも鮮明である。

その酪農学園の建学精神が「神を愛し、人を愛し、土を愛す」の「三愛主義」であると知った時は、驚きながらも親しみを感じた。私は若いときからデンマークが憧れの国で、近代デンマーク精神の父と呼ばれている「三愛精神」の最初の主唱者ニコライ・F・S・グルントビー（一七八三～一八七二）牧師が尊敬する人物で、「三愛精神」を知っていたからである。それで、酪農学園の教育の大切さを強く感じていたところ酪農学園大学でキリスト教学の教員として勤めることになった時は喜びと使命感に満ちていた。そして、もう一つ、酪農学園と強い繋がりを感じていたことは、私の周りに酪農学園大学の卒業生が多くいたことである。その人たちのほとんどは、常に「三愛精神」に生きている人たちであった。彼らは日本の中だけではなくて、世界中で「神を愛し、人を愛し、土を愛す」という「三愛主義」に生



朴 美愛

(パーク ミエ)

● 所属

学校法人酪農学園宗教学主事

● プロフィール

・ 大韓イエス教長老会神学校・大学院で神学、牧学、宣教学を学ぶ。宣教師、牧師である。

・ 韓国で教会の牧会を終え、一九九一年ボロンティア（栃木県・アジア学院）として来日したことがきっかけに、一九九四年宣教師として再び来日し現在に至る。

きて、「健土健民」を実践し、平和を実現するために働いていたのである。私はそのような酪農学園大学の卒業生たちとの出会いがあったことを今も誇りにしている。

黒澤西蔵はなぜ建学の精神を「三愛主義」にしたのか

皆さんは「建学原論」の前編ですでに学んだことだが、酪農学園の「建学精神」を「三愛主義」にした背景には黒澤西蔵の聖書とキリスト教、そしてデンマークとの出会いから成り立った個人史と当時の日本の状況が大きな影響を与えたことを看過してはいけない。日本は、敗戦によって一九四六年新しい「日本国憲法」が公布され、教育についても皇道を基調としたこれまでの教育理念は崩壊していた。酪農学園においても転換期を迎えて、これからの教育理念をどこに置くかを真剣に協議し、同年九月一日、酪農学園の教育理念をキリスト教の聖書に置くことを理事会で決定した。そして、学園の教育を聖書に基づく人間教育を通して、生き方を学び自分の価値観と世界観を広く形成し、「三愛主義」を実現することを目指すことにしたのである。

そのときのことを創立者・黒澤西蔵は酪農学園だより第一号に次のように記している。

わたしは「建学の精神」を何に求めるか、と自らに問うたとき、聊かも躊躇することなく、「三愛主義」をもって学園に生命を吹き込み、理想を与え、そのバックボーンとすることにしたのである。「神を愛し、人を愛し、土を愛す」という「三愛主義」は古今東西永遠不滅の真理に照らし、断じて恥じるところがない。

・アジア学院 (Asian Rural Institute) 職員、日本キリスト教団・西那須教会教師、酪農学園大学教員 (キリスト教担当)、日本キリスト教団・野幌教会牧師を経て、二〇一九年から酪農学園宗教主事として勤めている。

● 出身地

大韓民国・ソウル特別市

「三愛主義」について

「神を愛し、人を愛し、土を愛す」の「三愛主義」の「神を愛す」とは、天地万物の創造主なり、愛なる神を知り、敬い、従うことである。それは、人が真理を求める生き方の中に他のものに対して最善を尽くすことに繋がるのである。すなわち、聖書から教えられている神の教えに従うことである。「イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」（マタイ二二・三七―三九）と、聖書に記されている。「人を愛す」とは、人種・文化・宗教・性別など自分とは異なるすべてを超えて、人は尊いもので、平等であることを認識し、互いの異なることを受け入れ理解し合うこと、共に生きることである。「隣人を自分のように愛しなさい。」と教えられているが、それ以上に「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」（マタイ五・四四）と、聖書の教えである。「土を愛す」とは、黒澤西蔵は「人類の母体である土、母なる大地に心血を注ぎ豊かにすることだ」と言った。聖書には「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るよりにされた。」（創世記一・一五）と、記されている。すなわち、人の住むところである「土」を始めとする自然・環境などの被造世界を管理・保存することが「土を愛す」ということであり、神から委託された人間の使命であると、聖書は教えている。そして、「土を愛す」ことを実践することが「健土健民」に表されているのである。

では、「愛」とは何か。「愛」はかわいがる、いつくしむなど辞書には定義されているが、聖書には、「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛



は自慢せず、高ぶらない。靈を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。」(コリントⅠ一三四～六)と、「愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」(ヨハネの手紙Ⅳ四・八)と、記されている。C・S・ルイス (Clive Staples Lewis、イギリスの作家) は「人間の愛」について次のように語った。「人間は男女の異性の愛(エロス)で生まれ、父母の愛(ストロゲ)で育ち、友、兄弟の愛(フィレア)で成熟し、神の愛(アガペ)で人格が完成する。」と。酪農学園の教育は、「三愛主義」による人格の完成を目指すのである。

むすびに

現在、人類を脅かしているコロナ感染症の発生と拡散は生態環境の破壊による気候変化が原因になったと、言われている。これは、人間の欲望から生まれた人間中心の世界がもたらした結果なのである。このような時代を生きている私たちに、改めて「人としての生き方」が問われていると思う。その答えの大切な一つが酪農学園の「建学精神」の「三愛主義」と「健土健民」による農・食・環境に繋がる命を大切にすることである。皆さんは自然豊かな恵まれた環境で、様々な出会いが備えられている中で学びの道を歩んでいる。日々、最善を尽くし一日一回は、自分がどこに居るか地をしつかりと踏み、天を見上げ、自分の内面の声を聞き、隣の人に心を開くように。そして、皆さんが日々の学びと出会いで「神・人・土を愛す」ことを学び、実践して希望と喜びに生きるように願うのである。



大学礼拝が行われる黒澤記念講堂内部



建学の精神と「農・食・環境・生命」

This little light of mine

あなたには「座右の銘」と呼べるものがあるだろうか？

私自身、特にそんなことを考えることもなく、ほんやりと生きながらえてきたが、数年前、それまで七年間暮らしたカナダ・モントリオールから帰国し、母校の中学校にご挨拶に伺った時に、「もしかしたら、いつもこの言葉に支えられてきたのかもしれないな」と思い当たった。それは、校長室に掲げられていた「照千一隅」という、比叡山延暦寺の葉上照澄師が揮毫された書だった。「キリスト教の精神に基づく三愛主義」を建学の精神とする本学に奉職しておきながら、そして今回、建学原論のテキストに寄稿させていただきながら、甚だ恐縮であるが、最澄が天台宗を開くにあたり、どのような学生の育成を目指すかを示した「山家学生式」の中に見られるこの言葉に、どうも知らず知らずのうちに私の来し方は導かれてきたような気がしてならないのだ。

この言葉には、二つの異なる解釈があるという。その一つが「一隅を照らす」人物こそが目指すべき姿というものであり、与えられた役割、仕事を一生懸命に見返りも期待せず行うことそのものが尊いのだというもの。もう一つが「一隅を守ること千里を照らす」ことのできる人物を理想とするというものである。与えられた場所、分野で精一杯努力し、自分の「光」を磨き続けるということまでは同じだが、その際に常に千里先を見据えよう、そして願わくは磨いた「光」が世界を照らすような、そんな人を目指したいということだろうか。



吉中 厚裕

(ヨシナカ アツヒロ)

● 所属

農食環境学群 環境共生学類

● プロフィール

・京都大学理学部人類進化
論講座卒業、北海道大学
大学院環境科学研究所修
士課程修了。

・各地の国立公園（阿寒、
利尻礼文サロベツ、釧路
湿原、知床等）でパーク
レンジャーとして勤務。

・カナダ北方森林研究所客
員研究員、在ケニア日本
国大使館一等書記官・国

私は、今まで、北海道や各地の現場で、その地域ならではの「光」を磨こうと、そこに暮らす方々と一緒になって、最前線で様々な貴重な経験をさせていただいてきた。そして、地球規模の環境問題や国際条約・多国間協定といった国際的な業務に携わったり、国際連合という巨大な地球規模の組織の一員として、世界中の人たちと一緒に、言ってみれば少し俯瞰するような視点から考え、悩み、働く機会をいただいたりもした。今までそうやって様々な場所の「一隅」で磨いてきた私の「光」は、当然のことながら、千里先を照らすこともなくそのうち消えてしまうことになるが、この言葉「照千一隅」が、常に頭のどこかで、まるで通奏低音のように響きながら私は生かされてきたのかしらん、と今になっては思う。

期せずして、二〇一七年から本学で働かせていただくこととなった。「三愛主義」の「神を愛す」とは千里先の真実を見通せるよう努力を続けること、「人を愛す」とは自分の隣にいる人を尊重しお互いに生かし合うこと、「土を愛す」とは自分の与えられた場所をしっかりと守ること。もしそうだとすれば、「照千一隅」と「三愛主義」とは、実は同じことを目指しているのかもしれない。何とも不思議な巡り合わせに感謝している。

各地域という「一隅」と、世界、地球という「千里」とをどうやって繋いでいけばいいのか、一人一人が磨いている「光」をどうやったら遠くの人たちにも届けることができるのか、遠くで彼地の人々が磨き輝かせている「光」をどうやったら見つけることができるのか、どうやったら遠くで輝いている「光」と交信することができるようになるのか。

曇りつつある自らの火屋を磨きつつ、今しばらくは、この果てしない物語を紡ぐ旅を、若しあなたたちと一緒に続けて行きたいと願う。

*This little light of mine, I'm gonna let it shine.
This little light of mine, I'm gonna let it shine.
This little light of mine, I'm gonna let it shine,
let it shine, let it shine, oh let it shine.*

*Everywhere I go, I'm gonna let it shine.
Everywhere I go, I'm gonna let it shine.
Everywhere I go, I'm gonna let it shine,
let it shine, let it shine, oh let it shine.*

ゴスペルの曲の一節

● 出身地

大阪府守口市



別海町の牧場にて一夏を過ごす（1981年）

連常駐副代表、環境省釧路自然環境事務所次長、環境省地球環境局調査官、国際連合生物多様性条約事務局地球規模調整部長などを歴任。

- ・地球規模の視点と各地域特有の課題との関係性の強化に資する、実務的かつ行動指向型な教育研究を展開すべく奮闘中。
- ・趣味は、サッカー、テレマックスキー、バイオリン、三線、中世古楽、ジャズ、ジャズなど。

人との出会い、酪農学園大学との出会い

はじめに

私は昭和五二年四月、酪農学園大学酪農学部獣医学科に入学が許可された。二〇歳の時である。千歳空港に降り立った時、千歳市の空は、鉛色の雲が低く立ち込め、北向きには残雪が積り、故郷二本松の空とは全く違った、まだ春遠い雪国の様相をしていた。そして大学の狭き門をくぐった。四〇年前の出来事である。当時の獣医学科は四年生課程で、私たちの代が最後の学年であり、次の学年からは六年生課程となる節目の年代でもあった。卒業後は研究室教員の勧めもあり、岐阜大学大学院に進み、修了後は故郷である福島県に入庁した。入庁後は、畜産研究所一七年、家畜保健衛生所九年、行政三年と公務員生活二九余年送った。長い人生の中の多くの人との出会いが、私をここまで育ててくれたものと思っている。残りの人生を教育という場で、学生に対して恩返しをしていきたいと感じ今の職に就いた。私にとっての教育は、「愛と出会い」に尽きる。

今、しなければならぬこと

獣医保健看護学類に着任し、四年目を迎えた。北の大地、酪農学園大学の特色を出せる動物看護学教育、酪農学園大学でしか出来ない看護学教育を目指すという学園の基本方針から「生産動物看護研究室」を立ち上げた。生産動物に特化した動物看護技術者の養成である。認定動物看護師資格の他に、家畜人工授精師、剖蹄師（写真）及び家畜商の資格を取得させ、生産動物に特化した動物看護師の養成に全力をあげて取り組みたいと考えている。私が着任してから数名の学生が、家畜人工授精師及び剖蹄師の資格を取得し、N O S A I や家畜診療所等、生産動物分野に就職する学生が増えてきた。その学生たちも新しい出会いの中で、家畜人工授精師として畜産農家のために励んでいると思う。過日卒業生が私のところに遊びに来て、近況を話してくれ



菅野 美樹夫

（スガノ ミキオ）

● 所属

獣医学群 獣医保健看護学類

● プロフィール・出身地

一九五六年七月五日生まれ。福島県二本松市出身。二本松市は高村智恵子の生まれ里である。彫刻家で詩人の夫高村光太郎と智恵子を綴った不朽の名作『智恵子抄』が有名で、ご存じの人が多いと思う。「安達太良山から出る空が本当の空である。」と綴っている。私は本当の空の下で生まれ

た。目が輝いていた。卒業した学生が卒業後も母校を訪問してくれたことは、つくづく教師冥利に尽きる。

出会いはいつでも

一昨年(二〇一九)五月に、米国Indiana大学の研修生が酪農学園大学で研修した際、ゼミに招待し昼食会を催した。最初はお互いにもじもじとしていたゼミ生も、食事が進むにつれ打ち解けはじめ、ゼミ生から片言の英語で話しかけていた。いつも笑顔で話しかければ、意思は伝わる。学類の動物看護師志望の学生にとってもこれからの社会は国際化が進むだろうから海外の大学生と話し合う機会を少しでも作ってあげたいと思っている。

最後に、私は酪農学園大学獣医学科の一四期卒業生である。阿部光雄教授を知ったことで、家畜解剖学教室同門会関係者を知り、諸先輩方には大変お世話になりここまで来た。人との出会いは、いつでもやって来る。常に笑顔で受け入れることである。新たな出会いは、その人の人生にプラスに働くことを信じている。現在の研究室は、D棟三階にある。ドアは、いつでも開けている。学生がいつでも相談に来られるようにしている。学生には、かつて阿部教授が私に話しかけてくれたように、私から話しかけている。今後も三愛精神の下、人との出会いを大切にできる人間教育を学生一人一人にしていきたい。



牛削蹄師試験のため練習に励む獣医保健看護学類女子学生

育った。趣味は、ツーリングで、カワサキの二五〇ccの単車に乗っている。年に一度、道東方面に出かけるのを楽しみにしている。

北海道の食産業を担う人材へ

北海道の食産業の現状

北海道は我が国の食料供給基地であり、食料自給率はカロリーベースで二〇〇％(全国平均:四〇％)を上回る。北海道の食品工業出荷額(飲料など含む)は平成二九年で二四兆円に達し、製造品出荷額の四〇％(全国平均:二二％)を占める。また、農業産出額は一・二兆円(農産物五千億円、畜産物七千億円)、漁業産出額は三千億円であり、北海道の食関連の総出荷額は四兆円に達するとみられている。

ますます重要になる北海道の食産業

北海道の総生産額は人口減少や経済停滞により横ばいか減少傾向に向かうといわれているが、北海道の食料生産はいくつかの理由から今後増加することが予想されている。

一つ目は温暖化の影響による一次産品の変化である。現在、米は最北の稚内市のすぐ南の遠別町、リンゴは初山別村まで北限が上昇し、また、道央地域ではサツマイモや落花生も露地栽培が可能となった。さらに最近ではブドウ農家やワイナリーが増えている。年平均気温が一四℃を超えたことにより高級ワイン用のブドウが栽培可能となり、多くの新規事業者が参入するようになった。漁獲される水産物も徐々に変化してきており、寒流系のサケ、マス、サンマなどの漁獲が減少する一方で、暖流系のブリ、イカ、カツオなどが多く漁獲され始めた。

二つ目は食産業に係る技術革新である。農作物の北限の上昇は温暖化の影響もあるが、農業試験場や農業団体による品種改良が精力的に行われてきた結果である。また、水産物は養殖の技術開発が進んでおり、二〇三〇年には全漁獲量の六割が養殖魚になると予想されている。一方、食品製造業では近年、年間数件の大規模食品工場が新設されている。これは農畜水産物の生産量が増えたことも一因であるが、なによりも食品加工技術の発展によるところが大きい。



阿部 茂

(アベ ットム)

● 所属

農食環境学群 食と健康学類

● プロフィール

一九九〇年北海道大学水産学部卒業。同年月島食品工業株式会社入社、一九九四年より北海道立(現北海道立総合研究機構)食品加工研究センターにて北海道食材の加工による高付加価値化技術について研究開発を行うとともに、道内食品企業への技術サポートを行う。二〇〇七年北海道大学

以前は生鮮原料を大都市近郊の食品工場に移出して加工製造していたが、輸送中の品質劣化や大量の廃棄物処理が課題となっていた。食品の高鮮度保持技術や高付加価値化技術の開発・実用化が精力的に行われた結果、食品工場が「消費地立地」から「資源型立地」に移行し、多くの企業が北海道へ進出を始めている。

北海道の食産業を担う人材へ

上述したように現在の北海道の食産業は急激に構造が変わりつつある。新たな変化が生じると、そこに技術開発の必要性やビジネスチャンスが生まれ、人材を投入することで諸問題を解決し、そして新たな産業として発展させることが今後の北海道では重要である。特に近年は急激な温暖化の影響によりサプライチェーンの構築が間に合わない状況が発生しており、一次生産品の変化や食品製造の技術革新への対応は急務となっている。一方で、少子高齢化や一次産業の後継者問題などが深刻になり、北海道の食産業に従事する人材は減少している。現状では様々な制度の活用で人材不足を補ってはいるが、各会社が必要としているのは組織を牽引する幹部となる人材である。

本学では「食」に関わる専門的かつ実践的な知識を得ることが可能であり、卒業後には各々の専門を活かすことのできる職場がある。その知識を活かして北海道の屋台骨となる人材となり、食産業の発展のために尽くしてほしいと願っている。

建学原論を履修するみなさんへのメッセージ

コロナ後の社会環境はこれまでと大きく変化することが確実視されている。その多くがITによるリモート化によるものであり、人との関係性はよりドライになってくるだろう。一方、食産業は自然や生物が相手なのでリモート化には限界があり、また、多くの人々の協力によって成り立っている業界である。三愛主義や健土健民は、自然や人の協働の重要性を説いており、リモート化が進むアフターコロナこそ、その意義について心に留めるべきだと思っている。

院水産科学院博士後期課程修了。二〇一四年より現職。代表的な研究実績に「ブナサケを用いたサケ節の開発・実用化」、「食品加工における過熱水蒸気の利用」がある。前者は北海道の新たな特産品として定着した六次産業化の優良事例であり、後者は道内だけでも数百億円を超える加工食品に利用される技術になっている。

● 出身地

北海道小樽市

教養にこそ価値がある

はじめに

私は一年生が学ぶ基盤教育において健土健民入門実習の作物分野を担当している。以前、実習後にある学生から「なぜ、私が作物を勉強しなければならないのかわからない」と不満を言われたことがある。炎天下でトウモロコシの生育調査や草取りをさせられて、所属する学類の教育内容と距離があれば無理もない。しかし、私にとってはシヨックな出来事だった。もちろん、「健土健民」において作物は土と牛（動物）、人との間をつなぐ大切な学習項目であるが、ここではやや違った視点から教養の大切さについて触れたい。

作物を育てるために「土」は要らない!?

酪農学園の畑では毎年たくさん作物が栽培されている。実を言うと、作物はその体を支えるものと養水分があれば「土」がなくとも生育でき、場合によっては「土」を使わないロックウール（岩を焼いて作った綿状の培地）などによる養液栽培の方が、生産性が高いのである。「土」は様々な有機物を含むため、複雑で、変化しやすく、制御しにくいからだ。しかし、養液栽培には経費がかかり、野菜や花などの高収益作物以外では経営上の利益が上らない。一方、「土」をうまく生かせば農作物を安く生産できる。「土」は空気や水と同様に、とても貴重な資源と言える。

キャンパスに在るだけで「健土健民」を学習できる

皆さんにはキャンパスにおける景色の変化に気づいてほしい。作物生産では同一品目を同じ畑で栽培し続けると収量が年々低下するため、複数の作物を輪番で栽培する。牧草地では採草を繰り返すと裸地が生じて雑草が入り、



森 志郎

(モリ シロウ)

●所属

農食環境学群 循環農学類
園芸学研究室

●プロフィール

二〇〇六年新潟大学大学院
自然科学研究科博士後期課程修了、博士(学術)。拓殖
大学北海道短期大学助教、
准教授を経て、二〇一二年
より酪農学園大学に勤務。
研究テーマは花き園芸植物
の品種改良と高品質化に関
わる栽培技術の確立。研究
室の指導では花を観て、育

このことが乳量にも影響を及ぼすため、本学の牧草地は五、六年でデントコーン畑へと更新されている。二〇二〇年の初夏には白樺並木に隣接する畑が菜の花で黄色い絨毯となったが、それらは収穫されずに畑にすき込まれた。菜の花は地力を回復させるために緑肥作物として栽培されたのだ。その他にも、畑では素焼きの土管が地面に埋められたり（暗渠の埋設）、堆肥がまかれたり、大型機械で牧草が刈られたり、白い巨大な乾草ロールが出現したりする。何をやっているのだろうか？と思うだけでもいいし、できれば友人や教職員に聞いてみると良い。酪農学園大学には農業高校や農家の出身者、他学類の学生もいて、物的にも人的にも「健土健民」を学ぶ環境が整っている。

持続可能な社会を目指して

皆さんは中学校の技術・家庭科で動植物の飼育・栽培（生物育成と言う）を経験したと思う。これは二〇一二年から実施されているもので、文部科学省が生物育成技術は持続可能な社会の構築に寄与するものと考えたからだ。人工知能などの情報技術に関心の中学生が農業技術の一端に触れることで、将来、それらの技術が融合し、イノベーションが起きるかもしれない。一見、自分とは関係ないと思うことを積極的に学ぶことに価値があると思う。自分の考えや興味に留まっただけでは本質がみえないし、新しい発想は浮かばない。皆さんには皆さんの教養に触れて視野を広げ、真に豊かで幸せな社会について考えてほしい。

建学原論を履修するみなさんへのメッセージ

食べ物ではない花の栽培でも減農薬が世界的に進んでいる。それはなぜか？環境への負荷を軽減するためである。いつも「本質は何か？」を考えてほしい。あなたは今、何を学ぶのか？

て、学ぶことに重きを置く。実家はカーネーションの専業農家。学生のころは自転車とテントで旅したが、今の息抜きは家族での小旅行。

●出身地

千葉県南房総市



建学の精神と酪農学園大学の学生が目指す進路

転機と感じる力

はじめに

多くの人は、人生において新たな環境に変わるきっかけを何度か迎える。人生における転機は、きっかけが訪れそうなタイミングを自分で意識できる場合と、「あれが人生の転機だった」と後から気づく場合がある。私自身、五年の人生で「あそこが人生の転機だった」と言える事がある。一方その時は「転機に気づけなかった」あるいは未だに「気づいていない」小さな事が数多くあるかも知れない。

機を知る

「機を知るは農の始めにして終わりなり」、創立者黒澤西蔵の名句である。機農学校、機農高校、機農寮、機農コース……。機農もまた本学にとって重要なキーワードだが、これらの「機」は、いずれもからくりや機械の意、機能や機敏といったはたらきの意ではなく、物事の起こるきっかけ、きざし、しおどきの意である。機農とは、天気や自然環境の変化を察し、播種や収穫の時期などのタイミングを逃さず動くことである。サイレージ調製にしても、雨の日のサイレージ調製は労多くして品質はよくない。牧草やトウモロコシなどの栽培と収穫調整の流れは、どの農場も大差はないが、機を逸すると収量や品質などの結果に差が出るのである。「機を知る」ということは、科学的知見を身に付けるだけでなく、現場で感じる力、実行に移す決断力、それらを培うことも酪農学園における根本的な学びとして重要なことと言える。



高山 基樹
(タカヤマ モトキ)

● 所属

社会連携センター

● プロフィール

一九八九年に酪農学部 酪農学科を卒業し、三年間民間企業で顕微鏡の営業を担当した。一九九二年、酪農学園に採用され、入試課、エクステンションセンター、財務課、附属動物医療センターを経て現職。奉職後とわの森三愛高校野球部のコーチを経て一九九五年から大学硬式野

感じる力

私は野球の指導歴が長いが、気づく選手、感じる力を持つている選手は、絶対に伸びるし成長も早い。会社組織でも同様で、いわゆる仕事ができる人、信頼できる人というのは修正能力に優れており、同じ失敗は繰り返さないものである。一方で同じ事を何度も言われる人、失敗を繰り返す人は信頼を損なうことに繋がってしまう。その多くの場合、失敗を失敗として自覚できていないか、失敗の原因を究明することを怠ってしまうのである。「鈍感は最大の罪」とは、名将野村克也氏の言葉である。

現代の社会は、新型コロナウイルスの影響で大学生活のみならず、生活様式も大きく変化し元に戻ることが想像しにくい状況である。日々変化の連続であり、その変化をいかにして捉え対応していくかが、その人の成長につながっていくのである。そのためには自分自身で感じる力を養わなくてはいけない。些細なことを気にして、そこから多くの気づきを得る訓練が必要なのである。

「機」の気づき行動power

人は人生の転機を経験することが多い。そんな人生の転機を迎えたいのであれば、日々の生活の中からその前兆を見逃さず行動しなくてはならない。「小事は大事を生む」という。些細なことに気づくことが変化を生み、その変化が大きな進歩を招くのである。

まずは自分自身の内面や、周りの環境から「人生の転機」の前兆を見逃さないよう日常生活から感性を研ぎ澄まし、「目配り」「気配り」「心配り」を忘れずに生活しよう。転機に気づかず、人生を好転させるチャンスを逃してしまわないよう心掛け、気づいたら動く、感じたら動くことを実践して人生の転機を活かしてほしい。

球部の監督として学生と接し、念願の一部昇格も果たすことができた。二〇一四年に引退後もリトルリーグの監督を五年間務め、現在は中学生クラブチームでの指導をしている。技術よりも野球を通じた人間教育を心掛けており、人間力を育てたいと考えている。愛犬のアメリカン・ピットブルが、最近六歳の若さで病死し、はじめて深刻なペットロスを実感している。

出身地

北海道芦別市

自身が選ぶ道を「正解」に

キャリアとは、キャリアアセンターとは

キャリア (career) とは、経歴、職業などの意味に使われることもあるが、実は、「人が生涯を通じて関わる一連の労働や余暇を含むライフスタイル」、つまり「生き方そのもの」である。また、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」をいう。(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」二〇一一年) 本学も二〇一一年のカリキュラム改定からキャリア教育を導入し、二〇一八年には就職部就職課をキャリアアセンターへ名称変更をし、就職支援だけでなくキャリア形成支援に取り組むようになった。現在、三名のキャリアアドバイザー(キャリアコンサルタント)がキャリアアセンターに常駐し、キャリア授業の運営支援や、個々の学生に合わせた支援を行っている。

社会で求められる力「社会人基礎力」

二〇〇六年、経済産業省は職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を提唱した。具体的には、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の三つの能力・十二の能力要素である。

人生一〇〇年時代や第四次産業革命を迎えつつある現代において、社会人基礎力はその重要性を増すとともに新たな視点・切り口が求められ、



入江 遥

(イリエ ハルカ)

●所属

キャリアアセンター事務課

●プロフィール

藤女子高等学校卒業後、藤女子大学(人間生活学部保育学科)に入学。二〇〇九年卒業と同時に酪農学園の契約職員として教務部教務課(現・教育センター)教務課)に勤務。専任職員登用試験を受け、二〇一一年より専任職員として勤務。二〇一五年十月就職部就職課(現・キャリアアセンター

二〇一七年には、「人生一〇〇年時代の社会人基礎力」が定義された。この人生一〇〇年時代の社会人基礎力では、三つの能力・十二の能力要素を内容としつつ自己認識とリフレクション（振り返り）を通して目的・学び・統合のバランスを図ることで、能力を発揮しキャリアを切り拓くのに役立つことが期待されており、皆さんには大学生活の中で積極的に「人生一〇〇年時代の社会人基礎力」を身に付けて欲しいと思っている。

学びながら進路を考える

将来、皆さんはどのような仕事に就いているだろうか。卒業後、進学や留学する方も居ると思うが、いずれは社会に出る。「良い仕事は何か」と聞かれることがあるが、誰にとつて、何にとつて「良い」とするのか。個人によつて「良い」のとらえ方が違うので、皆さん自身の中にある答えを見つけ、納得した上で進路を選択して欲しい。

皆さんは本学で専門的な学問を学び、その専門知識を活かして日本が抱える社会問題の解決に携わることもできるし、変動する社会の中で新たに学び、自己のキャリアを切り拓くこともできる。今後の大学生活の中で自身の将来についてしっかり考え、卒業後も建学の精神・理念を大切に、周囲と助け合いながら社会に参加されることを期待する。

皆さんには、これから予測できない未来が待っているが、「正解を選ばなければ」と考えるのではなく、「選んだ道を正解にしていく!」と、自信を持って進んで欲しい。

出身地

北海道札幌市

事務課へ部署異動となったことを機に、国家資格キャリアコンサルタント取得の勉強を始め、翌年資格を取得。趣味は愛犬（六歳の柴犬）との散歩。



酪農学園の建学と酪連 ～北海道酪農の振興を目指して～

酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神

はじめに

学生の皆さん、酪農学園の「建学原論」と雪印メグミルクの関わりが想像できるでしょうか？

実は「酪農学園は農民が農民のために作った学校」、「雪印メグミルクは農民が農民のために作った会社」であり、酪農学園と雪印メグミルクのルーツと精神は同じなのです。

酪農学園と酪連（現：雪印メグミルク）の生い立ち

一九二三年（大正一二年）九月、関東大震災が発生し、政府は物資窮乏や価格暴騰に備えるため食料輸入関税を撤廃。これに伴い、海外から安価な乳製品が大量に流入、さらに売上げ不振に喘ぐ練乳会社の生乳買入制限等により、北海道の酪農民は窮地に追い込まれた。

「まさに農民の死活問題であり、このままでは北海道開拓の中心となる寒地酪農も挫折する。どうしても農民による、農民のための生産組織を」という黒澤西蔵らの呼び掛けに、零細な酪農民たちが立ち上がり、バラバラであった個々の酪農民が、協同の力によって自らを防衛し、発展させんとする意思が結集され、一九二五年（大正一四年）「有限責任北海道製酪販売組合（製酪



下村 善計

（シモムラ ヨシカズ）

● 所属

雪印メグミルク株式会社
酪農総合研究所

● プロフィール

一九九三年酪農学園大学農業経済学科卒業。一九九三年雪印乳業株式会社（現雪印メグミルク）入社。神戸工場、徳島酪農事務所、北海道酪農部、社長室、秘書室、人事部、酪農部、磯分内工場、（一社）Jミルク出向、西日本酪農事務所勤務後、現職。

組合」が設立された。その後、製酪組合に加入する者が増え組織が拡大したため、一九二六年（大正一五年）、全道を網羅した「保証責任北海道製酪販売組合連合会（酪連）」が組織された。

酪連は、その後、合併等を経て、一九五〇年（昭和二五年）雪印乳業株式会社（雪印メグミルクの源流の一つである会社）となった。

一九三三年（昭和八年）、酪連の専務だった黒澤西蔵は、酪連事業に一定の目処が立ち、かねてから胸の奥に温めていた酪農民教育の施設「社団法人北海道酪農義塾」開校の私案を開陳し、関係機関に協力を要請した上で、同年九月の酪連の臨時総会に提案し承認された。同年一〇月、札幌市苗穂の酪連敷地（雪印メグミルク札幌本社）内に塾舎を新築し、翌年二月、全道から選抜された生徒を迎えて始動した。北海道酪農義塾は、その後、酪農学園へと発展していった。

このように、酪農学園と雪印メグミルクは、ともに北海道酪農の振興を標榜して創立され、そのルーツと精神を同じくしている。

雪印メグミルクの存在意義と社会的使命

雪印メグミルクグループの存在意義や社会的使命（ミッション）は、時代を経て変わるものがない企業理念に定められている。コーポレートスローガン「未来は、ミルクの中にある。」のもと、「消費者重視経営の実践」「酪農生産への貢献」「乳（ミルク）にこだわる」の三つの使命を果たし、ミルクの新しい価値を創造することにより、社会に貢献する企業であり続けることを目指している。

当社グループの企業理念の特色の一つは、「酪農生産」に関する文言を入れ

● 出身地

愛知県知多郡美浜町

● 雪印メグミルクの沿革（雪印メグミルクHPより）

一九二五年有限責任北海道製酪販売組合設立
一九二六年保証責任北海道製酪販売組合連合会（酪連）に組織変更

「雪印」商標決定

一九四一年（株）北海道興農公社に社名変更

一九四七年北海道酪農協同株式会社（北酪社）に社名変更

一九五〇年雪印乳業（株）、北海道バター（株）（後のクローバー乳業（株））に分割
一九五八年雪印乳業（株）、クローバー乳業（株）両社合併社名雪印乳業（株）に
二〇〇三年雪印乳業（株）から市乳部門を分離し日本ミルクコミュニティ（株）へ

ているところだと思う。酪農と乳業は車の両輪、一体化産業と言われて久しいが、当社グループは、そのルーツや精神、企業理念、目指すべき未来も含め、国内酪農生産基盤に軸足を置き、酪農生産者と共に歩み、これからも歩もうとしている企業であり、こうした考えの下、酪農乳業の発展を目指し様々な事業活動を展開している。

酪農生産への貢献

当社は牛乳乳製品メーカーであり、本業を通じた安定的な生乳取引やミルクの新しい価値創造によって、持続可能な酪農経営の安定（酪農生産への貢献）に繋げることを責務としているが、①全国の酪農家が組織する実践的研究組織「日本酪農青年研究連盟（略称：酪青研）」の活動支援、②酪農現場に即した実践的な調査研究や経営管理支援等、本業以外にも様々な活動をしている。終戦直後の北海道の酪農は、極端な飼料の欠乏と価格の高騰、乳牛の屠殺増加、骨軟症の蔓延、繁殖障害の増加等から危機に陥った。この事態を重視した酪農青年の間に、北海道の酪農を振興しようという機運が全道的に高まり、当社もまた一九四八年（昭和二十三年）初頭から酪農再建運動を展開、これらの酪農青年の組織化を図るため酪農青年研究会の設立を促した。当社の提唱は大きな反響を呼び、全道各地に自主的研究組織として酪農研究会が誕生、さらに全道的組織として同年七月、北海道酪農青年研究連盟が発足した。同連盟は、その後組織を拡大、北日本酪農青年研究連盟、次いで日本酪農青年研究連盟と改称され現在に至っており、当社は酪青研発足以来、活動支援を続けている。

酪青研では、優秀な酪農経営を実践している酪農家の成果発表の場、研究

二〇〇九年日本ミルクコミュニティ（株）と雪印乳業（株）が経営統合し、共同持株会社「雪印メグミルク（株）」設立

二〇一一年雪印メグミルク（株）が日本ミルクコミュニティ（株）および雪印乳業（株）を吸収し、新生「雪印メグミルク（株）」誕生

●雪印メグミルクグループの事業分野（雪印メグミルクHPより）

○乳製品

バター、マーガリン類、チーズ、スキムミルク、その他

○市乳

牛乳、乳飲料、ヨーグルト、デザート、その他

○ニュートリション

粉乳、機能的食品、栄養剤など

会で発表された内容を各地で自分の経営に活かしていく研鑽の場として、毎年「日本酪農研究会」を開催している。経営発表の最優秀賞には黒澤西蔵の名を冠した「黒澤賞」及び農林水産大臣賞が贈られ、その荣誉が讃えられるとともに、参加者は各々がリーダーとなり地域酪農の中心として活躍されている。

酪農総合研究所は、酪連創立から五〇周年となる一九七六年（昭和五一年）、酪農乳業の共存共栄を目指すことを目的に設立された。具体的な活動として、個々の酪農家にご協力を頂き、圃場管理や飼養管理等の課題解決に向けたフィールド調査研究を行い、得られた知見・技術は「酪総研シンポジウム」等の開催を通じて、広く酪農家への経営支援へと展開しており、国内酪農生産基盤の強化と持続的発展、食糧の安定供給に寄与する事業を推進している。このように黒澤西蔵の哲学の基礎である「酪農は健土健民の母」、農業は「天・地・人」の合作という思想は、今もなお、当社グループの中にも脈々と受け継がれ、酪農振興を目指した取組みを継続している。

むすびに

今日の酪農学園と雪印メグミルクグループが存在しているのは、黒澤西蔵の精神を受け継ぎ、今に繋いできたことに他ならず、その精神や信念が如何に崇高なものであり、後世の人々に大きな感銘と影響を与えてきたことの証でもある。

この「建学原論」での学びが、酪農学園に入学された学生の皆さんの有意義な学園生活はもちろんのこと、その後の人生においても心の支えとなり、さらなる飛躍をされんことを願っている。

○飼料・種苗（雪印種苗）
飼料、種子（牧草、飼料作物、野菜）、造園、肥育牛など



酪農学園の教育理念の継承Ⅰ

酪農学園で得たもの

はじめに

今から約三八年前、大学入学後の間もない頃デントコーン畑の除草の実習があった。*創生寮後方にある採草地である。小高い丘で冷たい風を受けながら学生が横一列に並び、「鍬」を使いながら除草を行った。なぜこんな原始的な除草をするのか不思議に思った。風の強さや方向、土の粒の大きさや硬さや色、デントコーンの葉色、雑草の種類、暗渠の有無による葉色の違いなど自分の目で実際的に体験的に観察することに意義があった。また在学中、実験器具がなければ器具を作れば良いとか、物差し一本あればデータが取れるなど、酪農学園の実学という理論が多く現場で使われ、実践してきた。自然を相手にしながら作物を作る原理であったり、家畜を飼育する環境管理であったり、酪農学園全体が多様な分野で科学するフィールドであることから、実学、実践は、今後も継続されなければならぬと強く感じている。もちろん、学生自らが身に付けたい専門を早期に発掘することが重要である。

知的好奇心

物づくりに興味があった自分には、大学の学問に対する考え方が馴染みやすかった。特に家畜行動学、昆虫学、応用微生物学など行動を伴う実験・実習に興味があった。興味深い名の科目が多く、内容が気になった。しかし、そもそも何を学ぶために酪農学園に来たかが問題であり、学びたいものがあるのかどうかも問題である。私は可能な限り土壤や植物関係に特化して履修



鎌田 一宏
(カマタ カズヒロ)

● 所属

北海道岩見沢農業高等学校

● プロフィール

一九八七年酪農学園大学酪農学部酪農学科卒業、一九八九年酪農学園大学大学院修士課程修了(遺伝育種学)

農業教員として北海道旭川農業高等学校から勤務。その後、壮瞥、岩見沢農業、文部科学省派遣、北海道教育庁、岩見沢農業教頭、中標津農業校長、倶知安農業

を試みた。逆に家畜関係は最低限の履修とした。自分が興味あるものと無いものでは、学びの意欲の度合いが大きく異なり、学び方や姿勢にも変化がある。学びたいものをセレクトすることが大切なことには違いないが、その時にあまり興味無いものも選択肢の一つとして幅広く捉え考えることも重要である。学びには、出来たことよって知的好奇心が強くなり、より深く学ぼうとする力が働くことがある。この力を発揮させる原動力が酪農学園の教育理念の中に強くあるように感じられる。卒業生の中には、酪農を中心とした農業や北海道の自然に憧れを抱き入学してきた人が多かっただろう。そのように憧れる思いを連続的に学ぶシステムが構築されている酪農学園は、自然の摂理から科学する心を養い、人づくり、土づくり、牛づくりを行って思うように思う。皆さんには、是非酪農学園にある豊富な教育資源を活用し、知的好奇心を抱き、学んでみたいもの、積極的に探求することに期待をする。

これからの社会と酪農魂

これからの社会に向けて、スマート社会をはじめ、二〇五〇年問題、とりわけ人口減少、少子高齢化、労働力の減少、社会保障費の増大、インフラの老朽化、地球温暖化、気候変動、食糧問題、AIによる仕事減少、医者不足等々を予測した問題が取り上げられている。また、農業も同様に社会の変化に対応した経営や技術の導入が必要になる。そのため、農業においては、国際化と情報化を踏まえ、科学的な根拠に基づいた生産物の説明、海外マーケットを視野に入れた経営などが求められる。このように大きな社会の変化が伴う状況であるが、酪農学園の教育理念である実学の強さと経験値から学び取った技術と技能を生涯に渡って使い続ける精神（酪農魂）があれば、匠の技として社会で活躍できると考えている。近い将来、農業経営、会社経営、行政職など多種多様な職業に就くことになるだろうが、是非酪農学園で何を学び何を身に付けたかを振り返る日を考え、自分らしい生き方を構築することに期待する。

● 出身地

青森県

校長、大野農業校長、美幌
校長、現在岩見沢農業高等
学校校長として勤務。

* 創生寮は、二〇一五年度に
閉寮し、新設の希望寮に移
行した。



酪農学園の教育理念の継承Ⅱ

ソムリエの仕事と酪農学園の学び

皆さんは今、将来就きたい職業があるだろうか。酪農学園大学に入学した当時の私は、将来就きたい職業を答えられなかった。自分に何ができるかわからなかったし、やりたいこともなかったからだ。しかし今はソムリエの資格を取得し、たくさんのお客様とつながりを持ち、接客の仕事が天職と感じている。

未成年の方には「ソムリエ」という仕事はよくわからないかもしれないので簡単に説明したい。ソムリエとは、食事の際に飲み物全般を提供する給仕係のことだ。メインはワインだが、ミネラルウォーターや日本酒など、様々な飲み物に精通していなければならない。また、どんな料理と飲み物が合うかと提案をする場面もあるので料理に関する知識も必要になる。ソムリエは料理を作ったりワインを作ったりはしない。その分、作り手の想いをお客さんに伝えることも務めだと思っている。

ソムリエの資格を取得するためには日本ソムリエ協会が行う認証試験に合格しなければならない。この試験がめちゃくちゃ難しい。このソムリエ試験の内容は、地理、歴史、気候、地質、土壌、栽培、発酵、醸造など多岐にわたるものだ。地理では各国の山脈や河川の名称、産地名を憶える所からがスタートだ。ワインの歴史は八〇〇〇年とも言われており、人類の歴史とともに



水上 貴
(ミスカミ タカシ)

●プロフィール

一九九八年（平成一〇年）
酪農学園大学農業経済学科
卒業（経済学研究室大谷ゼ
ミ所属）

大学卒業後、学生時よりア
ルバイトをしていた新さっ
ぽろアークシティホテルへ
入社。

二〇一三年日本ソムリエ協
会認定ソムリエ資格取得。
ほかに北海道フードマイス
ターの資格も持つ。レスト
ランマネージャーを経て現
在、事業部事業推進課課長。

にワインの歴史があると言われている。それだけに各国の歴史も学ばなければならぬ。土壌、栽培に関しては酪農学園大学で学んだ知識が活かした。「土壌学」や「作物栽培学」といった講義の内容を思い出しながら勉強した（もともとまじめに講義を受けておけばよかったと思っただけでもない）。

私がソムリエの勉強を始めたのは三〇歳を過ぎてからだだったが、正直言っても大学受験以上に勉強をした。人生で最も勉強したと言ってもいいだろう。なぜソムリエを目指したのか、それはお店に来てくれるお客さんにもっと喜んでもらうには何が必要か、また、会社員として売上を伸ばすために自分ができるか、それらを考えた時に自分がスキルアップすることが必要だと考えたからだ。結果としてソムリエの資格を取ってからは、定期的に「ワインセミナー」というイベントを開催するようになり新たな客層を獲得し固定客も維持している。また、常連客も資格を取ったことを喜んでくれ、頻繁に来店してくれるようになった。さらには、酪農学園大学の先生や関係者がお客として私のセミナーに参加してくれたこともあった。想像してみてもほしい。講義を聞いていた側の人間と立場が逆転し、大学の先生の前で説明するのは、とてもやりにくい。しかし自分にとってはいい経験になったし、ある意味、学ばせていただいた酪農学園大学への恩返しが少しはできたかとも思えた。こうしたセミナーはおかげさまで二〇回以上開催し、継続することで私自身多くの方々と出会うことができ、それが自分の財産になっていると思う。酪農学園では数年前からROUPというワイン作りの研究グループができ、私も影ながら協力させていた。ワイン作りは栽培―醸造―販売とあり、正に酪農学園大学の全学科に絡む産業だと思っている。今後酪農学園出身者でワイン業界へ進む人が増えてくれると非常にうれしい。コロナ禍で飲食業界は大変だが私にできることがあれば是非協力したい。

● 出身地

北海道北広島市



酪農学園の教育理念の継承Ⅲ

自分らしく生きるために

皆さんは、これからどんな人生を歩もうとされているのだろうか？

突然ですが、今、一〇年後の自分が笑顔でワクワク仕事をしている状況をイメージして頂きたい。

現在コロナ禍で学生の皆様においても将来に不安を感じられている人も多くいるだろう。これから社会の在り方もどんどん変化し続け、社会に求められる人材像も変わってくる。正確に言えば、コロナ禍以前より変化は始まっていたが、コロナの影響で加速すると考えられる。多くの組織において、今までは成功パターンという答えがあつたので、言われた事を言われた通りに出来る人材が求められてきた。しかし、答えのない変化の激しい社会の中では、自ら考え、意思決定し、行動にうつせる人材が求められるのである。とはいえ、組織において一人一人がバラバラに意思決定を行なってしまうと、組織が崩れてしまう。ここで重要になってくるのが、「理念」である。組織においての理念は、「価値観」「ビジョン」「使命」等が示されており、方向性を合わせるための重要な指針で



田中 仁

(タナカ ジン)

●所属

株式会社 仁 代表取締役

●プロフィール

二〇〇三年 酪農学園大学
経営環境学科卒。
卒業後、ワタミフードサー
ビスに就職。
店長職を経て営業企画部と
して勤め、二〇〇九年に退
社。

二〇〇九年、青葉柔道整復
専門学校に入学。

二〇一一年、株式会社 仁
を設立。

ある。

仕事をすることで組織の理念に共感できなければ、自分の「価値観」を無理に組織に合わせなければならなくなり、組織と個人、両方にとって不幸な結果になってしまう可能性が高い。

ここで、冒頭の「10年後の自分が笑顔でワクワク仕事をしている状況をイメージしてみてもいい」という質問に戻る。そもそも仕事にワクワクするイメージが湧かないという人や、イメージをしてくれたとしても「とはいっても」というような言葉で未来に蓋をしてしまう人が多かったのではないだろうか。それは楽しそうに働いている姿を見せられていない我々、大人の責任だと私は考えている。また「社会はそんなに甘くない」「どうせ無理」「自分がやりたい事よりも、安定が大事」等の無意識に刷り込まれた同調圧力が影響している。

学生時代は、自分の「価値観」を養うための重要な時期である。斯く言う私も学生時代、恩師に出会うまでは、否定されるのが怖くて人に夢を話すことが出来なかつた。しかし、恩師や夢を語り合える仲間ができた事で、自分らしく生きるための基盤となる「価値観」を養うことが出来たのである。

自分らしく生きるとは、「何のため」という自分の「使命」を設定してそれに向かって生きることである。この「使命」を設定する事が重要であり、私の場合は「自分らしく生きる人を増やす」と定義づけしている。(次頁に続く)

現在、札幌市内にて介護福祉事業、障がい福祉事業、児童福祉事業を通して理念である「人と人との関わりの中から生まれる、感謝・感動・笑顔を想像し続けま

●趣味

キャンプ、草野球

●出身地

北海道増毛町

とはいえ、私も数年前までは会社に形式的な理念はあるものの、個人の明確な「何のため」はなく「生活のため」だと自分に言い聞かせて仕事をしてきた。するといつの間にか個人の「何のため」がお金を稼ぐ事になり、会社の「何のため」が利益を上げる事になっていたのである。その頃の私は、自分の言った通りにやれば失敗しないという考えを持っていたため、言われたことを言われた通り動くスタッフを評価した。そして気が付くとスタッフに対してまるで将棋の駒の様にトップダウンで指示を出すようになり、その結果、スタッフは自ら考える事を止めた。そして指示待ちで、成長を感じられないので仕事をやられとなり不平不満が生まれてくる様になったのである。そうするとスタッフとの関係性にも溝が生まれ、会社の内側にはかりエネルギーが取られてしまい、私も毎日が辛く、「何のため」に仕事をしているのだらうと悩む日々が続いた。

そんな現状を打破すべく、私は色々な学びの場に足を運び、会社の理念をもう一度スタッフと一緒に考え直す事を決意したのである。理念を共に考える事でスタッフと会社の「何のため」が重なり、スタッフが少しずつ自ら考え行動してくれる様になったのである。この出来事がきっかけで、私が指示を出すよりも、一人一人が自ら考え行動することがより社会に良い変化をもたらす事を学んだ。そして、なによりスタッフが生き生きと仕事をし成長する姿に喜びを

感じる自分がある事に気付き、私個人の「使命」が前述した定義に辿り着いたのである。

多くの人は、大学を卒業後、組織に属し、多くの壁にぶつかるだろう。

きっと、自分らしく生きるなんて難しいと感じてしまう場面も多々あるだろう。だからこそ、皆様にはいま一度、酪農学園大学の「三愛精神」「健土健民」という素晴らしい建学理念を学び、実践し「何と無く」ではなく「何のため」を考え一日一日を全力で過ごして頂きたい。

「自分らしく生きる」とは、好き勝手自由に生きるという意味ではない。しっかりと自分の内側から溢れる情熱や価値観から「何のため」を導き出し、自分の生きる道を自分で創る事である。何事も、成功したからワクワクするのではなく、ワクワクするから成功するのである。

皆さんには、是非、一〇年後、二〇年後の自分を出来るだけ具体的にイメージワクワクして頂きたい。そうする事で、想いが実現する可能性が高まるからである。

最後になりますが、皆様の明るい未来を心から願っております。

継承編講師一覧 (2011-2020年度)

実施年度	講演 タイトル	講 師			
		氏名	所属 (当時)	卒業 修了 年度	学科 研究科
2011	国際問題への理解 ～「三愛精神」にふれて	小林 毅	特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ ジャパン 事務局長	1973	短大
	大きな目標を抱き前進せよ	生出 正実	(財)北海道三愛畜産セン ター	1963	酪農学科
	「健土、健民、健産のバ ランス」とは	河原 淳	NPO法人えんの森 事務局長	1982 1984	酪農学科 酪農学研究科
2012	酪農学の教育理念の小さ な継承	秋葉 保	聖隷学園聖隷クリスト ファー大学	1969	酪農学科
	学園で学びその後四七 年、今思うこと	松山 増男	(有)トンデンファーム 代表取締役	1964	酪農学科
	「人、動物、そして自然」 —野生動物保護を通して 地球を診る—	森田 正治	森田動物病院長 NPO法人道東動物・自然 研究所理事長 別海町野付半島ネイチャー センター長	1968	獣医学科
2013	I'm Proud to be a ... Farmer. —農業の豊かさを求めて—	永井 進	(株)永井農場	1990	文理科短大 酪農科
	「土を愛する」精神を継 承する	渡辺 兵衛	日本キリスト教団八雲 教会牧師	1969	酪農学科
	私の目指す農業	上村 篤正	(有)ウエムラ牧場	1991 1993	食品科学科 酪農学研究科
2014	キリスト教が日本の酪農 民の心に大きな影響を与 えた	名久井 忠	元酪農学園大学教授	1963	短大
	黒澤哲学の農業経営への 適用 —経営理念の明確化で未 来を拓く—	石田 陽一	(有)石田牧場、(株)め ぐり 代表取締役	2006	酪農学科
	彼女たち(私)の獣医学 入門	石井万寿美	まねき猫ホスピタル獣医師 アニマルライター	1984 1986	獣医学科 獣医学研究科
2015	次世代放牧への挑戦 —原料に勝る製品なし—	塩野谷孝二	(有)レークヒル牧場 牧場長	1995	酪農学科
	自分が望む変化となる	松代 有生	フリーアナウンサー ラジオパーソナリティー	2003	酪農学科
	人の想いは実現する —国際協力の魅力—	南 繁	ガイア動物病院	1972	獣医学科

実施年度	講演タイトル	講 師			
		氏名	所属(当時)	卒業修了年度	学科研究科
2016	きっかけが今の人生	片岡 朋子	(有) 夢がいっぱい牧場	2011	食品科学科 健康栄養学専攻
	地域を支える畜産業	浅野 政輝	(有) 浅野農場 代表取締役	1996	酪農学科
	この土の器をも —「健土健民」を海外技術協力で実証したい—	要田 正治	(独) 国際協力機構JICA	1986	獣医学科
2017	卒業しても近い酪農学園大学	逢坂ゆき子	横山製粉(株) 営業部 開発課	2009	食品科学科
	「健土健民」私のチャレンジとロマン —新しい日本酪農の未来を求めて—	井下 英透	農事組合法人 Jリード代表	1980	酪農学科
	Zoo医師のおしごと	秋葉 悠希	日立市かみね動物園	2014	獣医学科
2018	ミッション —酪農学園大学の使命と自分の使命—	安藤 博之	DSファーマアニマルヘルス(株) 営業本部 CA事業部 東日本支店	1987	酪農学科
	道北 池田牧場 三代目の挑戦!! 「変化すべきところ」と「受け継ぐべきところ」	池田 辰実	道北 池田牧場 代表	2005	食品科学科
	NOSAI 臨床獣医師の業務と使命	廣田 和久	北海道農業共済組合連合会 家畜部	1984	獣医学科
2019	ないものは、つくる ～野外ロックフェスとDo It Yourselfの精神～	草野 竹史	NPO法人 ezorock 代表理事	2001	経営環境学科
	有機農業の実践と建学理念 ～理念を体現していくこと～	小路 健男	無何有の郷農園 農園主 北海道有機農業協同組合 代表理事組合長	1984	農業経済学科
	「酪農」から流れてたどり着いた先には?! —乳搾りの出来る社会福祉研究者? ? ?—	大澤 史伸	東北学院大学教養学部 地域構想学科准教授	1987	酪農学科
2020	建学精神を学び健土健民を実現する技術の研鑽 (創意を尊び革新を目指して) ～ほんもののミルク・チーズを求めて～	三浦 学	(株) のほりべつ酪農館 代表取締役社長	1986	酪農学科
	自分らしく生きるために	田中 仁	(株) 仁 代表取締役	2002	経営環境学科
	自分に出来ることって何? ～ With コロナの時代に生きる～	松尾 直樹	野幌南どうぶつ病院 院長	1983 1985	獣医学科 獣医学研究科

編集後記

建学原論コーディネーター

テキスト後編「建学の精神と酪農学園大学の使命」において、本稿をご執筆くださり、ご講演をいただいた皆様には、感謝申し上げます。

二〇二一年度、新型コロナウイルス感染のパンデミックはまだ収束に至る先が見通せていません。希望は確実にあるはずですが、しかし、予期せず起る事が突き付けられていて、社会全体というよりも、一人一人がもつ力が試されるという面も多くあるようです。多数の講師のお話を聴いて、学生の皆さんの生きる力を高めていくことに役立ててほしいと願います。

建学の精神と酪農学園大学の使命

- 二〇一一年九月十四日 第一版第一刷発行
二〇一二年九月十四日 第二版第一刷発行
二〇一三年九月十四日 第三版第一刷発行
二〇一四年九月十四日 第四版第一刷発行
二〇一五年九月十四日 第五版第一刷発行
二〇一六年九月十四日 第六版第一刷発行
二〇一七年九月十四日 第七版第一刷発行
二〇一八年九月十四日 第八版第一刷発行
二〇一九年九月十四日 第九版第一刷発行
二〇二〇年九月十四日 第十版第一刷発行
二〇二一年九月一日 第十一版第一刷発行

企画・編集

建学原論運営委員会

発行者

野 英二、山舖 直子（五十音順）
酪農学園大学

〒〇六九一八五〇一 北海道江別市文京台緑町五八二二
電話 〇一一三八六一一一二（代）

印刷所

社会福祉法人 北海道リハビリ

〒〇六一一九五 北海道北広島市西の里五〇七番地一
電話 〇一一三七五一一二一六（代）

MEMO

氏名：



生きるを学ぶ。
学びが生きる。



酪農学園大学は、2020年度（公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において大学評価基準に適合していると認定されました。

苦難は忍耐を、忍耐は練達を、
練達は希望を生む。

ローマの信徒への手紙
5章3～4節